

そして『もののけの日本史』（中公新書、二〇二〇年）があります。

それから、次の発表者でいらっしやる町泉寿郎先生のご専門は、日本漢文学。編著書に、『国分青厓と明治大正昭和の漢詩界』（研文出版、二〇一九年）、そして『洪沢栄一と「フライランソロピー」』（ミネルヴァ書房、二〇一九年）があります。

そして、最後の発表者になる牧角悦子先生のご専門は中国文学。著書に、『経国と文章』（汲古書院、二〇一八年）、そして共著に、『学際化する中国学』（汲古書院、二〇一八年）があります。

御三方が寄稿した論文集、私の前にあるこの本ですが、『前近代日本の病氣治療と呪術』（思文閣出版）。二〇二〇年に出版されました。今年（二〇二二年）四月の、まさにコロナ禍の中で出版されました。先端医療が新しい疫病に役立たなかつた中で、改めて生命観の見直しが問われています。その中で、日本や中国の生命観とはなにかといったこと、単に、疫病や呪術ということを超えて、私たちは過去に何を学ぶことができるのか、そんな知見を得ることができないのではないかと思います。

では早速ですが、小山先生、最初のご発表をお願いします。

第一部

研究報告

1

もののけと呪術

小山 聡子

こんにちは、小山聡子です。今日は、もののけと呪術についてお話しさせていただきます。

まず、呪術という言葉ですが、古代・中世の間は、仏教の加持や修法、經典読誦を呪術とは呼んでいませんでした。これらは確かに単なる呪術ではなく、仏教の思想を内包した実践の形そのものになるわけですが、これまでの宗教史の研究では、加持や修法、經典読誦などをすべて呪術と称して研究してきた歴史があります。ここでも現代的な意味で呪術という言葉を使うことを、最初にお断りしたいと思います。

初めに、「ものけとは何か」をお話したいのですが、ものけというと、現代人は、妖怪のことだと考える方が多いと思います。しかし、古代・中世では、「物気」と書いて「ものけ」と読みます。古代のものけは、漢文体の記録類では「邪氣」とも書かれ、多くの場合は、死霊、死者の靈魂です。生前に何らかの恨みを持った靈魂が、加害者に対して病気や死をもたらす、と考えられていました。

特に平安時代中期、ものけは、深刻な病因として捉えられており、たとえば、清少納言の『枕草子』では、病と言え「むねのけ、ものけ、あしのけ」と書かれています。ものけが病の中で二番目に挙げられていることから、この時代の病気の原因として、かなりの割合を占める深刻なものだったというわけです。

現在は、ものけは「物の怪」と書かれます。古代では、「物怪」は、「ものけ」ではなく、「ぶっかい」と読まれました。主体が明らかではない不可思議な出来事のことです。今は通常、「物」という字の間に平仮名の「の」を入れ、「物の怪」と書きますが、これは主に近世以降に使われた言葉であって、古代や中世の段階では「ぶっかい」もしくは「もつけ」、「ものけ」と読みました。つまり、物怪とは、神仏、もしくは正体の定かではない超自然的存在が怒りや不快の念を抱えていることを告げ知らせる変異、あるいはのちに大きな災いが起こることを予告するための変異という意味を持つ語でした。今の意味とは異なります。

では、古代・中世の貴族社会では、病気になる、誰がどのように治療していたのでしょうか。治療者として挙げられ

るのは、僧侶、陰陽師おんようじ、医師です。今、陰陽師を「おんようじ」と読みましたが、古代や中世前期では「おんみようじ」ではなく、「おんようじ」と言っていました。主に、僧、陰陽師、医師という三種の職業に就く者が、貴族が病気になる時の治療者になります。

現在では、コロナ禍で世界中の人々が不安に陥っていますが、なぜ不安に陥るのかというと、やはりコロナウイルスというウィルスが、どういったものなのか、どうしたら病気が治るのか、ということがいまだ明確になっていないためだと思います。これは古代でも同じことです。病気が分からないことほど恐ろしいことはないのです、病気の原因を明らかにすることが大事です。病気が分かれば、その治療法も見出すことができますようになります。だからこそ、現在、コロナウイルスに関する研究が行われているわけです。

平安時代には、陰陽師の占いによって病気の原因を知ろうとしました。一人の陰陽師だけでは不安なので、二人、または三人といった複数の陰陽師を安倍家と賀茂家から呼んできまして、占いをさせるわけです。陰陽師が占い、疫病やものけなど、病気の原因を挙げていきます。ただし、二人、三人の陰陽師が占いますので、結果が異なることもよくあります。その場合には、病人の周囲にいる者、たとえば病人の親族が、どの陰陽師の占いを信用するかを決めるのです。病気の原因が定まりますと、それにふさわしい治療を行います。

治療者は、病因によって決まります。ものけや瘧鬼が原因ならば僧侶、疫病ならば陰陽師が中心になって治療します。瘧鬼というのは、瘧病をもたらす鬼のことです。瘧病は、おこり病、わらわやみとも言われます。現在で言うところのマラリアに比定される病気です。

僧侶は、多くの場合、加持によってものけによる病や瘧病を治療します。治病のための加持は、私の力を僧侶が媒介者となって病人に伝えるというものです。

病気が疫病であれば、般若系經典の誦誦、神社への奉幣などのほか、陰陽師による祭や祓が行われました。ただし、疫病治療の場合には、基本的には僧も疫神を調伏しないですし、陰陽師も調伏したりなどはしません。なぜならば、疫神は畏怖すべき神であり、神を調伏するのは危険で恐れ多いことだと考えられたからです。疫神は、牛肉が好きだと考えられていました。たとえば、『続日本紀』には、疫病流行時に「土牛」を作り追讎おいはなをしたことが見えます。このように疫神には、好物を饗応し、気分良く去ってもらおうとしたわけです。

僧侶が疫神を調伏するのは、古代の段階ではタブーでした。ところが、これが中世になると、調伏した事例が多く出てきます。事例を確認できるだけでなく、疫病時に行える加持法まで確立します。

さて、病気は、必ずしも原因が一つだと考えられたわけではありません。もののけと瘧鬼が同時に病気をもたらしていると判断される場合は結構ありますし、もののけと疫病の両方が原因だと判断される場合も、しばしばあります。病気を患っている期間に、何度も占い、もののけはおさまったけれども瘧鬼だけが残っていると判断される場合もあるなど、結構複雑なのです。逐一占いをして、その時々の状態を判断し治療を選択していくということが行われていました。

では次に、もののけを調伏する方法についてお話したいと思います。もののけの調伏方法は、經典を元に編み出されています。少々細かい話になりますが、阿尾奢法という加持法が「験者作法」という史料に書かれています。そこには、「唐では撰縛行」とあり、「円仁の口伝による」とも書かれています。円仁（七九四〜八六四）とは、平安初期の天台僧で延暦寺第三世座主となった人物です。このように、阿尾奢法については、勝手に考え出したものではなく中国のものに依拠しており円仁という偉いお坊さんから伝えられた、という主張がされており、説得力を増すための工夫がなされています。

もののけを調伏する方法は、院政期以降になると多様になっていきます。たとえば、絵巻物『餓鬼草紙』の出産の場面では、

もののけを調伏する役割を担っていた僧と巫女が描かれており、ヨリマシ（霊媒）の役を担う巫女の傍らに雙六盤が置かれています。出産時にはもののけが跳梁すると考えられ、もののけをヨリマシに憑依させて呪縛し調伏する（正体を語らせる）ことが行われます。本来、もののけを呪縛するのは僧なのですが、院政期になるとヨリマシも調伏への能動性が求められ、ヨリマシが雙六盤を使って雙六をするようになります。実は、調伏のために、雙六に限らず、囲碁や将棋も行われていました。これらのゲームをする時には、サイコロや碁石、将棋駒の音が出ます。音によってもものけを調伏できるという考え方があったのではないかと考えています。このことについても少しお話ししたいのですが、時間も限られていますので、拙著『もののけの日本史―死霊、幽霊、妖怪の一〇〇〇年』（中公新書、二〇二〇年）をお読みください。

もののけへの対処として、その正体を語らせ、正体にふさわしい対応をするというのが大事です。よく、もののけは調伏の対象だと言われますが、もののけを調伏した結果、正体が明らかになった段階で、調伏ではなく供養に切り替える場合もあります。それは、もののけの正体が、たとえば自分の父親だったりする場合です。父親が、ヨリマシの口を通して「私を供養して成仏させてください」と願うと、供養に切り替え成仏できるようにしてあげます。成仏させれば、再び現れて悪さをすることはないのですから、場合によっては供養も有効なのです。

しかし、もののけの正体が信頼できない相手である場合には、話は別です。たとえば、『源氏物語』で、光源氏のもとにかつての恋人の六条御息所の霊が現れ供養を求めますが、光源氏は形だけの供養をしつつ、大掛かりな調伏をさらに行うという、矛盾したことをします。なぜならば、六条御息所の霊を気味悪く思い信頼していないからです。

人間が霊の言うことに騙される場合もあります。たとえば『栄華物語』には、小松僧都という僧の霊が出てきます。小松僧都の霊は、藤原道長の息子教通の北の方を苦しめたとされています。小松僧都と教通は、従兄弟関係にありました。

小松僧都の父は藤原道隆、教通の父は藤原道長であり、道長は道隆一家を斥けたことからその霊を恐れていました。教通は、当初は小松僧都の霊を恐れていたものの、ヨリマシを通して霊と語り合ううちにすっかり心を許してしまいました。ところが、北の方の出産後、小松僧都の「加持をやめなさい」という要求を聞き入れたために、北の方は死んでしまいました。つまり、小松の僧都の霊は、教通を油断させることによって、北の方を殺すことができたのです。

このように、ものけに對する対処は、正体を明らかにした上で、霊の正体に応じたかたちでなされてきました。治療にあたって病氣の原因を明らかにすることが大切である点は、現在でも同じですね。ただし、病氣の原因を明らかにする方法や治療法は違います。

さて、こういうお話をすると、加持や雙六などによつてもものけを調伏できると信じていた古代・中世の人間は、信心深かつたのだらうと思われる方が多いと思います。たしかに、現代人と比べると神や仏に對する篤い信心を持っていたが、盲目的に信心深かつたかという点、そんなことはありません。自分に都合の良い信心を持っていたということが言えます。たとえば、疫病をもたらす神の調伏は本来タブーでしたが、危篤の状態になった時などはしばしば調伏をしています。神を畏怖し敬意をはらいつつ、自分に災いが及び窮地に陥ると、神であつても調伏してしまうわけです。

また、しばしば病人は、「病氣を治してもらつたら、絶対に參詣します」などという約束をしていました。けれども、病氣が治つたら、コロッと神との約束などは忘れてしまう。この点は、古代・中世の貴族も現代人とあまり変わりありません。

その上、願いを聞き入れてくれない神はたびたび恨まれていました。たとえば「病氣を治してください」とお祈りをしたけれども全然効果がない時には、神は恨まれてしまふわけです。

『曾我物語』では、烏枢沙摩王もひどい目にあつています。曾我兄弟による敵討ちが成功するよう願つた箱根権現の

別当は、烏枢沙摩明王像を逆さに掛け、「殿たちが本懐を遂げないうちは逆さ吊りのままだぞ」と脅迫しています。本尊の絵像を逆さまに掛けるのは調伏の方法の一つではありますが、どうかと思うほどに、自己本位な方法です。人間の側の勝手な都合によって脅迫、恫喝までされてしまうとは、神や仏も楽ではないですよ。

このように、古代・中世の人間は信心深くとよく言われますけれども、決して盲目的な信心を持っていたわけではありません。古代・中世の人々の信心には、現代人の信心に通じるものがあります。

昨年からのコロナの蔓延で、世界中大変な状況となっています。日本では、アマビエという妖怪の姿を描くとコロナに罹患しないということが話題になり、アマビエが人気を博しています。アマビエの姿を描くことによりコロナへの感染を防ごうとするのは、いわゆる呪術でしょう。

現在アマビエがもてはやされて、お札みかとして売られていますけれども、コロナが収束した暁に、アマビエに心から感謝する人がどれだけいるのでしょうか？これは、神との約束を反故にしたり、神を恨んだりする古代・中世人の信心と通じるのだろうかと思えます。

かつて行われていたもののけの調伏に関して、現代人はついバカバカしいことだと思いがちですけれども、古代・中世人のことを笑うことなどできないと思います。現代人の多くは、アマビエの絵を描けば絶対にコロナに感染しないとは思っていませんが、まったく意味のないことだとも思っていない。わずかでも信じる心があるからこそ、お金を払ってお札を買ったり、絵を描いたりしてみるわけです。困った時には神頼み。これはあまり変わらないと言えるでしょう。

足立…続いて、町先生お願いします。